

日本におけるクマの行動変化とクマとの共存に関する地域観光モデルの提案

21911119 川端 将暉

1. 目的と背景

近年、クマによる被害（農作物の食害や人身事故）が増えている。SDGsにおいて山地生態系の保全が叫ばれる中、このような被害を出すクマはどのようにして生まれるのか、同時にクマを観光資源としない、している地域におけるSDGsに沿った今後のクマとの共存方法について考える。

2. 方法

書籍、新聞、インターネット等を用いた資料調査を行う。

3. 結果と考察

ツキノワグマ、ヒグマそれぞれ4つの獣害事件（乗鞍岳クマ襲撃事件、十和利山熊襲撃事件、三毛別熊事件、福岡大学ワンダーフォーゲル部ヒグマ事件）をピックアップし、問題となるクマが発生する要因を推定した結果、ツキノワグマは餌不足、人間との接触が挙げられ、ヒグマはマタギの減少、1990年の春グマ駆除の廃止、ヒグマの観察を目的とした観光客の増加が考えられ、両者の大きな違いとしては人馴れ具合であることが分かった。

既存の地域の取り組みとしては、兵庫県但馬町はクマの出没情報の共有、対策（藪を刈る）や学習放獣を行いつつも、クマを含めた自然を利用し、人々を誘致しており、主に農業体験を通して町の魅力をアピールし移住への興味を誘っている。同じく観光地及びヒグマ出没エリアである北海道知床五湖では2011年に高架木道を設置する取り組みがなされ、ヒグマの人馴れをうまく利用した形になっている。

それらを踏まえ、クマが多く生息する地域（秋田県鹿角市、北海道斜里町、羅臼町）の観光モデルへの提案を行う。

秋田県鹿角市ではツキノワグマが凶暴な個体になってしまう環境要因を考慮すると、ツキノワグマとの関係を自然公園化により断ち切ることが好ましいと考える。畑、山菜取り等で生計を立てている地域住民に対する補填としては環境保全に関する税補助、または自然公園の管理職員として雇うことを提案する。

北海道斜里町、羅臼町と知床半島ではヒグマの人馴れ問題が観光に利用できる可能性があることから、ヒグマを観光資源として扱うために、マイカー規制を行いながらヒグマを観察しやすい場所を作り、一人当たりの消費額が多いインバウンドを集客し収支をあげる提案を行う。他にも、宿泊パッケージや伝統、特産品の鮭などを、オンラインを通して発信、販売し、利益を確保することを提案する。

・学習放獣とは…捕獲されたクマにベアスプレーを吹きかけるなどの「お仕置き」「嫌がらせ」をしたうえで放獣する教育方法

4. 結論と今後の課題

クマと一口にいてもツキノワグマとヒグマでは人間に対する反応が大きく異なる。そのため、地域はそれぞれの生態に応じた策を打ち出す必要がある。

また提案した内容の実現可能性については、綿密な調査が必要である。

5. 参考文献

1. 環境省 クマ類による人身被害について（令和 4 年 12 月 7 日）

<https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort12/injury-qe.pdf>

2. 環境省 堅果類の着花結実情報について

<https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort12/ketujitu.pdf>

3. 知床財団 クマ渋滞 交通事故にも注意！2016

<https://www.shiretoko.or.jp/report/2016/05/3222.html>

4. 北海道大学 リサーチタイムズ

<https://www.hokudai.ac.jp/researchtimes/2021/12/post-42.html>

5. 山中 正実『知床のヒグマと人の関わりの現状と課題について』2020

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jahes/36/1/36_87/_pdf/-char/ja